萬葉文註釋

全

中村俊定文庫
文庫 18
891

中村俊定文庫

東京都立中央図書館蔵書

東京都立中央図書館蔵書

むかしの俳諧とりて生涯とあるを今こゝに生涯とりて風雅を楽り
嗚呼楽りは世乃習ひにして乃の無聲こゝに声人と世話に
武人の芸を深く武人の芸を武士り時に世の物ゝ彼発秩父と
弟生言ふ捷徳の業仲を接て、和学を学く者るへとせん
るを称ふ生涯ぞ者を及ぶ人此年別る五年志
度の風言ふ法にて物ふ者庵の法ふ拾ひ人とて芸
者道の古り傳りて称ふ俳諧をもて天下の一四とせる時
ふ人とすふ誰ふ俳諧を楽ふ人俳ふ動て者度の志とせやと
多沈の口懐を述て生涯ふ者ちゝを衍くぬ

集唐亭

自序

それ十とせあまりの昔より碁を好み志を立てより日々に来る二親の
給はざるひ世に先生達の棋を借りて其の奥義を学び得んと
営みまた上手の芸を並べ見習ひ只をもされば学びて
拙きても少しは法を窺ひ衆の見る人日夜を用ひて先生達の棋を写し
往々を取りかかりて手々の手筋を探ひ手段の秘訣を探る人も
ありて詳に因ふに抜き手の手筋を考へ来ての一流に至る
就中は作法の運びを棋譜に今の世に知る人々
少く能ても悉くしは初心等の手も頓悟の階梯を減する
ことも有る事の我れ新選の附録を記して習ひ子の為にし
一冊となし一手々の手段を記し置きぬ

嘉永六癸丑春　　出雲　一新子

凡例

一此書は先哲の名局の中より先手の手段を抜き書く
先手に習ふ者の為に其の後の人の心得と為すべき
機に臨みては其の指し方を会得しては先の局の勝負を知る
ても指し方の実に学び難きは皆先手にて其の要を得る
手先後を用ひ十論の勝負を決する事は上手の棋を並べ
局の三段を経て手の指し方を得て他の手段より生ずると
棋は出来て後手の手を崩し他の人は其の法を得て附録に記し初心の
為とてもの句毎の変化を尽くす事ゆゑに続き知る者
一此書は不易流行の手より先手の法を学ぶ為に示す手段を抜き
入る道程もと説き明かして手の数を以て後の法を示す
一五段の手古来より伝はる人の先手の定式を論じて曰

新撰五百番歌合序

かゝる由をよせて五番を撰ばせて和
歌の句は。——の字発句に余情を尽せる歌の新字なり知べし
一上は古人の業を学ばせ下は八代の後世紙墨を新にせしかば和歌
復興と為時代を古八代の義を得る人おのゝ又たまゝ代々ならさるる人
あれを言挙(テンジ)奉りて或い偽彼平信を紀氏に法を学ばせて偽中の偽さえ
成れ世代のテニヲハをはじめ又先賢歌の句を新きを人和と信ぜず人
あり世名員に句を作信ずして拙き所に偽れ和を学ぶ始を知で
やを解べき所出の形は弁ずる所歌の下に為て異作あるべし
一足出とは歌とい新句の新を新する業を附句を書て性附て
変化する中立りて新いまと附き和拙き性を性を作者なると
新る以下を上ふ足出いむと上失て生附き拙き新句新歌を
性中之●の下は一句の上を作あるに万用の中句新るい生新句新作法を

性孫に加へ作不弁する中も強は性新き作の大事にて句作に
新句を作者と云るを世代和古人作と凡の名目を付くい
は三体の設は芳り定る法あり性新き者出て定中は和弁新を
更り作員を立新る作句を第て作者れ和乃雑あ人実は新長い
又句は芳を作句を求て所ら新ばる変を少まる
一▲以下いを新句の作を作る中対句の論を新新作この弁て悪
世別と作新と和又を新ら作いと句あるを新ば上と和
られとはいて句新るいかゝるもゝ世代ユト作上と和
一「」の中は新る古作引句は又作ト人抜と行作者り上る
上の作と加ら作。——の長あるに皆作要作の和と考べ
一弁井(ベンボウイ)句会仏の新皆足新を平ふ又人むの仮字を新作
一右の作は——を引るに新句は何を所て足加(さる下之)

一句上に〇△を出して七文字八佛を着くハ世話にいふくさりとおなし
業ハ此句あるゆゑ再び生死を受る事ハ陸中に
んあるあらハかゝるものも絶えざる事なかりし
一指合古経の中ハ世の宗家に発願文字を集め其文字を遠寄
是ハ割られて附会を学ふ時ハ人を変化とハ附乳の中にて其心のあんまゝ
一世の人此句を作る極楽安心の大事にかゝはりてあるべき
古極ハ又後の要にて小說をきハ一巻の成行を弁へし学者衆
指合を知る我三石の印として生涯不可忘事也を弥おかる人かる心学
大小の旅をまもり古今和の外の法をとくも附乳の論を立てて
三文中に今を当時ありて指て都ての理を滅つるハ我らく遊ひてよく是をひ
ある中を去れても人もあまりひあるく是を終まで世をきよりなく正しく
まいる古めかしく初學を抑へるて叔をなれしる事の云ふ人もなし 二

發願文

蓮二房著

善導大師発願文曰「願弟子等臨命終時心不顛倒心不錯乱心不失念身心無諸苦痛身心快楽如入禅定聖衆現前乘仏本願上品往生阿弥陀仏国到彼国已得六神通入十方界救摂苦衆生虚空法界尽我願亦如是発願已至心帰命阿弥陀仏」

往生して倒彼已下ハ又世に出て衆生を度せんと誓ふ事を発願之
趣文に教る所ハ東の西の花と往生蓮に登ると云事にて生死無の有に
於き一あふ誦を要く仏法を開て是を宣の為也報恩集の
意ハ滅罪話の曲を補ハんかさる其代不易の法也すきはあるゆゑか
来た法の白隠禅師と其法に寄る文に従ひ学ひしく

古式舟仙

傳法　楊さくひとくは海陸の彼岸に

白上をひとん楊の二重候を御あるべし「心不顛倒乃至涅槃究竟シテ」仏

教文の教えうおもは「仏性の法門」と言うべきを「人」と言うべきを一句の

中に教えり▲仏言葉は教の取方をこれ生死の法門は

以り即楊はこの文会に陸りて一句は表裏実体の生死の作べ

有人　義抜中に不りしも入あり　訳教

為を出ちと入てあき尽る花の系は毒をもセ生も入れ八彼岸ちるみ

抜て抜の句字の上法の意教弁無も本来招喚の法は生を信ずるを

陸の乗まる義を合め▲教て仮は言語言ホの句抜ぬ芸表ちを

生教をよこて生教余情は捨て「無迷吾陸の言い情を浮生」と言ちる

法を少陸て一向深あき句をまく人あり陸と法陸ち考べ

有　湖の彼岸　と　時　ぬりて　時宜

為句の仏も広余句抜と言べは句をおくる表の表と陸つかりを知ちる

教長抜と不邑生物生人を為ちる広び時宜ち一表あり時宜八

生物表生生の実系伐附ちとそ抜の人おを三井の晩陸と尽て

仏水の系をもそ文指陸い蓮陸抜生あり無陸と抜ちる表あ者

只あてて銭早但時ぬりて八陸のちもまちを本三会合ちいちる

訳時　乃さんてる知りて抜ちる　丈人

為句湖の水仏と言ぬり三時ぬりて為夕男対ト陸尽ち抜て不邑　丈人

ちいと為ちる誤抜と大小さ也力を来ちる抜を就尽ちエ八伐ち

以抜為の抜りてあぬぬ抜を生こと化の尾を足生をりまあ●さん

ちと伐為は作ちる伐ち抜ちん人を抜いり抜て人ある事を▲教て抜伐の

句を作ちかる尽ちと為ちー抜ぬ白抜りき叶い抜見文分ち

生陸を早て為句の意抜尽ちふ毎ー

有恒　月影乃ゝ　ゆ　傳家い　ゆ　ゆ　　文恭

第句の刀字を省てアノ人ハ刀さしてもコハイ人ジヤナイヨウ知てゐる人の意と云

生人ゆ人を殺害する者の形容を作る人を食ふまで殺害する者あり

●覺生坊界を去て平生第句に對して深の意あるを作り▲此句の意人を

殺りし情を殺する意を第句の意をたかく

てく第句に附する情を人々に表する白無くまかりたい竹をも

第句　　殺ろ市ちとまよ　あるとの花　　時言

第句を古書に曰する俗文を「生殺」と云ふ平生を殺害する者の情よ

う意を刀を以一生の業とする者の情ハ此ものの情ハかくの如世間をくまと

眺する歌あり▲第八風俗人の体系句を引て本書の作者と云ふを

第句の意よりて古を思ふ日月星辰より乾坤を隔さりて隔

の狂き汚れおのくに第句の事と知へ」さまたい時分天地の附句をすちに第句

と云ふ濱句人第句よ、あを狂ふ人をて時分天地に生殺句の

用とする拙句の意方に拙句　又人倫物付にも第句の意あり時分

天地にも有人記情の意あり多くに第句の事とする不限く考へて

会稿　　宋意ら来れて　　第竹あるくゝ　　宝接

第句に宋意ら来れて第竹あるくゝ」と云ふ生涯を生涯を考へる一切の

事も蘇ら多くを殺の体裁を作る人の耕作人あるを知ら知る体

宋の宋意人拙の情に宋を殺害する時の仮示刈安を刈て来て形も

拙あり▲宝接に第句の意を宝接句を考へ出す殺害をとる意方

附して拙句を附句と拙句に宋意の二字を用て生情を少世に強意

せい情の意を失ひて句意通ず宝接の意のたとへ方

訳　　殺文と殺母　　人

第句宋意ら来れて殺文と刈あ池て仕ニスルと作ふ行と人臣主体を考へ殺ゆ

又おなじく女房俊成の孫にあたる人の梅枝住吉社の人は何ぞもあれば俊成
ゝ生れ給ふ事なれども表きも後の世をこそ世を捨て引籠
句作を専の掛物にて▲新勅撰に
情を新て一首ある歌を求るをいとり今世新勅撰はいおく会釈比論
の歌にて新勅撰に似よりたる十首の選にて何人の作にて
会主　隣好　おれたの花を見ゝ

新句後鳥羽の年号なれ中ほとなく二条の歌に又立ち寄知
を考ふる老人いまだ口のるの人伝聞や一時の考ぶるぶるの人に玄賓者のと
以い伝のあれて不つく考よ歌あるゝ時好やゝ歌を作るゝ歌
士の笑ふ歌あり▲刈安の句も同文の句を所ゝ又ゝ新勅撰
会釈ゝ刈安に廿文俊成ハ田を歌なて老に解ハ似寄ハ人俊成も解モ
歌あゝ歌ゝ又立ち寄れ歌の中に屋ゝ見れ手ゝ歌を歌

会主　去ゝ俊成と一新　坊

新句のあるぶゝ下と関の中を入る仏ゝ人に歌を考ふ候掛ゝ歌ゝ作人に
風の歌木を展れ休る為歌の大新撰ある中村の宅にて言葉句を作り
目を考ふ候のあるゝと働ふ指を指あり▲初会釈ハ新内ゝ老の少
歌ふる考ふゝ関の途中を少村ゝ考ふ庭を歌ゝ歌ゝ歌ゝ保ゝ新
さて歌引ひ俊の集ゝ会主に有の集に似て新句の歌をゝ下

向附　美俊の上句　坊

新句のあるゝ上を新撰ゝ歌梅ゝ俊の上句を新撰ゝ歌
考ふゝあるゝ上ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌
考ふ人ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌
江戸の年人歌を歌ゝ歌ひ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌
如考ふ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌ゝ歌

●此如自他ともに付句せざれば何れの句にても此場に付たる前句の上まで目につき又
其の前句に示す所を執て作者の思ふ事を具すまで出る句作の法も宜しく見し
▲十種の四附は前句の趣向を知るを専一に寄する迄ぞ前句に見える人の句附は
遅く附て見る所の趣を読み取る事にて前句の意を見るをことゝするにある事にて
「前句の意味を考へ其上を推量し附る心得にて得る迄」有んとせり 又此附方を世に場
此は前句の人を作る由を思ひ何れの句を作る人 若又其前句の意を
作る者と考へて以て絶る事に在る事を思ふても初発の見る所を附る事にて句を
八作の附方を定めては先より一句の前句を見る物なれば我等のくらべた

会主　絵ある書を見て雅を天和三年　協

前句を見さする詞にも趣向の出る事を前句に対する物類を考へる
其句に景色の名所を一所に記す物を見てかく中にある物は景物類は絵ある物の数々と
天和三年と作者の題の年月をよく調べ 其人も調へる事なし

▲前句を見る時は前句の意を知る事にて 其句の趣向を求めて作者の
心持を弁へ句の世の前句を見る時は其情に叶ふ人の姿を付
る語りも作る中にも此を見付けて句を見る心得 此は作る事
は作者自己の情にて前句に対する姿をさせて前句の詞を見て出す
物を付れば其は二句の事を以て出れ其意の姿先達故トいふ

会主　様乃無年為も時出る小僧　人

前句の作者あって絵ある見るを疑ひ御句を除る作を見る人を考へて絵る度一句
或いは大勢の前を見る辺の席の所を作る時に前句の余を付けて華やかといへる程を出て
定まるも其に前句の句を見るといへる席も六 定の用 前句には前句の
外の趣向又其名を作も前句へ見まして其は前句を前に探
前句の前に時ある 是は二句の面影に見えありさまに前句の
「前句の前に前句の情を案じて前句の外に姿を見る人も句作には前句の用を」

是作るより内の情をむすぶや」トハ前句を両除ト又て両情ト作れる説を
いへりとまた作ハ二句の株を上る事なきハ句あそび作意なくてハ付ふまし

会釈　　玉川の月見宿り行られ　　時分

前句の色膳末路に出立の振を見立て玉掛をいふんと老る村雨の露払の真子に取よせ
る法月の明残る塩釜の荒磯のいさゝか趣あり古い津の玉也お句之△投有ん
会釈とは発句中季あり元来七名ならも一句中季の字にて執ぬ無句柏子也是母ハ会釈
季ト有ん記情句附之法是に引る説旬ハ有季ト会席之是又会釈のさらひを
よく知めんため之有雅会席の法ハ最もちらし十論曰「諸ハ付るといふ附ハ中略あら句れ
是なたは見合せ出て中略一字のてにはを残さゞる丈を合ふ有心附と名づく」
又曰「相附ハ其句其掛の振に寄て或ハ容に物を言ふ事あるハひらけんに
趣ふとも親疎ハ附所の変ニ随ふ」以是見れ有心に軽重ある事を知へく又曰「前句ハ
六七字句ゟ此会釈をまる其掛なき其季中の振やうハ捨くに及ぶて中略一字の

変化を此会釈に依る事」以是見れ会釈に軽重ある事も知らし山中冬の
容に柱ありく附るを其掛の会釈ト人情を通しさひ山中の人

鳧　　苔古る鳥居のにほひもきよめて行　　宕

前句清月もなし只行徒めるは何と見立一生所在をあはせる趣向之

会　　渋紙あらゝすゞる挽臼　　坊

前句捨遠しハ寡も厚てもその捨に引罷ては何と見立て其の奥を老るに用
宿ひの振ありて俳ての寂の趣と座面の母にも先づ其ハ俗事周子の用意と
臼挽者る越あり△相句作に不用の用ト無用の句ト二ありおる句へさうた存すき乳ハ
ある句を無用の句はて婦女之又不用の用ハ伝てを何なくても付乳は少なかまと
一句立の若て入用の語をさして其句ハ不用なり第一と後句に用ありと申す
そ其句あそびのくき旨立されハ挽臼ハ趣向として渋紙衛之氏作れ人にする
とせるハ臼の御なき處も渋紙ト作れり又其趣ト作らハ其の移換ある人を

まろ銭といひて彼是の出入をせず丁寧さはくれて猿もあらん

有重　振舞を忘てままも嫁の花ちりて　人

前句の志る中挨拶ぬ人と云ふ者也の執心を見るにかしこも世件懐あっても
まさ若仕るの心気ならまじな嫁の振あり●振舞ト作る事は望ひく姿ならい又ちりてトハ
な嫁は正花に作れる会釈の句也▲姿を言るの句為の大事之同嫁まて世件別まト
作り又まくる振を作より笑ふ杯付人い人五の哉にて姿を言て生あなる人い正風にあるを
論にある姿ハ前句の人五ト付句の作ト論あふ所ハて句の上れ為の有無に論に
たとひ句上に生ありとも前句の人をいさうも挨拶ふ不あるい姿を失ひて付ると
ほじ又明就ひ悉杯と云い前句も人之も付る事をあり会あるおさをうる之まて執
向者あいお哉人又お言を上て実を作事に路に史ぬ句をおあん分ふあるく

会　拾あまりてもいさふ　初千　台

前句のかいまでる夜の姿縁付そる姉の振舞を出て秋里い来つる件人云に来へき用を察
す拾日の出入て姉といひて妹おふんまて執い拾先まて事を定める拾若とあり▲拾や
子の歌合せその挨拶おさってまる事を宮の仕するも萩ある出兵論等の件
とい人云てうつり人云にとい前句の哉を入るる計まで出ると白作るに深あし
思ふ人言をいらむくと振をお言て案すれい附へき拙振自然と深を執向の
生あり出人言の作を作るを情に往に理に情にまて当りう言姫するまし

誰　寒く鳴棚へあけおく盃臣様　協

前句のいさふに来の句と云ふ人云をお作冬う掃除の哉向之

会重　も勤しなきけい実も底にすさ　挨

前句盃臣様を相く上る夜へ作より来て入る件人云にまる人い何まて大様の用いと
居るに代る句らく出来ると君るに内義い会釈してあちの哉やぢの底に
悩しきの北施の暖気におい快うと結れいまい出雑なイヤ今年の余寒にい何ぞも
底う係りてとまさて振あり▲古とお此文室後い代の法橋に済きて世ふ底の

代表をうる不孝者」トソ扨七名八作い御細工無事〳〵宝接のミかく
さまを云接て伺ふ毛ゑを時分ハ如〳〵家ハ宝接ハ苗
流才一の活法ハて宮ゆに成発ハ名人業ハ之義陽ハ接ハ無事ニ成ハて
「新のちゝ法くハ老の月を拭ひを見あハせて夫べまハ和を知さん」宝ハ
工を宝接の手ゆき悟ハ宝美 巨達ハ花家地ハ草の礼 家伝ハ移るの義八作の対
方ハ矣りおゆの理味をまれて年改進歩ハ必き陽を見て宝きハ宝

有独 さゝあひ北伺る赤暴おゆ叔父ゆ 坊

茅白の実も広乳さ広ゑ主人を茅ハ接て独ハの拭と又宝ハ人ハと考る
ゆ〳〵ハき拭宅のをぢ知人ハ家のをひの毒ゆ伺ハ来て伺ハと問ハ
ハ乃〳〵 庶でとヤハ妙のハ知おろ〳〵と又乎り伺ハの義代も主宝で見
のも庶とヤハ人妙ハ姑のおを加てきゝ又たゞる拭あり●さゝを接合ハ作て生
ゑと答ハり位意ハあるを尚の庶ハ主ハ教伝ハヤ一来方の工技之

人

会亜 孔武カ〳〵拭ハ拭のさん用

茅白の接合ハ親子姉妹多人教の母ゑをぢのめひハ教伝の拭と宝ハ多
教ゑる用を考ゑハ妙ハハて妙人支援の拭と又接合の一月めひとて大勢
ゆて仕ゑる母く設ひハ来ゑる者ハの訳て知〳〵拭ゆ〳〵接ハの拭あり
●拭ゑハ白ハを唯仕ハ拭の中ハ作ゑる姿の作伝一法ハて茅の白ハ英ハい
主法二白の月ハあ〳〵ハ生り▲法て妙人お妙全支援を作人伝の月と

会独 冶阪孔接ゑ孤ハ法みの拭ゆ〳〵 恬

茅白のかゑる伝ハ手の教ハ接ハ法宝用を考ゑ接ゑ考ハ阪附を告れ
長ハ行分てまゝまゆ人とヤゆゑハ接独ハて結合ゑ拭あり▲冶阪ゑ
孤ゆみハ女中の妙ハ合拭ゆ人接ゑ拭ゑ拭白のゑ方を知〳〵

有亜 杜使の孝くゑ宝ハ人 紀

茅白の孤ハ宝を陽て阪独ゑ〳〵生伝安ハ拭ゑ法宝ハ人を考ゑ独焚ゑの

然るに日本之術なりしの画筆に似血の不自由なる拙き本居所々に手習の
諸生あつめて富貴栄華を講釈にて代々の書写子弟子に集めてさらく
人かかる貪欲の欲情も常に高き二つ所へ年ぬけて頗るひなる熱あり▲附句は
句調に人をかざる位にて葉ざれたる雅致の玄妙は推されまし

会重　　二葉ふたつ香の侭なれ芳しく　　人

発句文人の合する趣に二を挑む者は杜律の如くと説する俳諧謡嫁
唐詩の中に捨てて以て泥まずして、花をよく捨てての情を尋ぬべし
梅匱は二葉ふたつと見えて人情に通ふ所をもて詩の世界を主として
ここを発句の人を本とする旨あり●二葉とは文人の俳諧之精神を作りて続きて
▲試みに美悪のかくされとは捨生の句は文雅に作る俳之出世ぶ中に兼ね二ッ
もしとは一ツは美悪の今捨ては句を作りて吏を変化とおもふ俳の
おや乃句に美悪は一句あつても通ずる意よく人情を通ずる者の

あかよそて月花に並べて京都らしき拾ふ手には未然に肖て悪しとは又人々の
欠る句を好みたるは俳諧を作りとも作るなき、続五論・去来抄の無論を図
ておさき改へきは古人の桃を愛し棺は附句は人に従て表徳の体を守
を朝をそきくと捨を辞し書留を記するを発句を記すとせりのくさあれ
も会杯の葉方と題し又附方も記ありて題せりいはれは生得ほし

会　　香森をさくの方そ秋艸のくつ様　　人

発句梅もまく情にてと見の好みの捨を銘ぶする句を考るにおのが
あひなき人をそ見るに頼れは香森ぞ中なくいきとりて訪ふるう
秋艸は存する捨を味の深かあつきれは捨葉て秀句に情を抜き主度
を歎する捨あり●発句に銘する句あまりは安き生用の句を作りて俳意の作は

会　　かく紙のあとなり眺るをまちほして　　坊

発句の捜を人をさそふ人の味より見てある俳諧之道ニ俳を尋ぬるにはら隠き工夫あり

の様さて二寸ばかりあるもの[illegible]ありしが後の
[illegible]人自おのづから内体の物対して人態の自計あれば[illegible]
[illegible]自の姿を[illegible]世の内体おのづからまもりい海[illegible]
[illegible]あるに勇伝に去様も[illegible]を極とあり是論義ふを変
化しおのづから[illegible]人あり何[illegible]
材れのるまして[illegible]考[illegible]
[illegible]何[illegible]

記

金大地の体をるかくてつくる

[illegible]のあと字一ふれこあり向おて[illegible]
[illegible]人の用を[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

ことさら人ハ我ゆゑに手をかたる人ハ後世の心おこしまで若きをもする人を見て程を嫌
ゆゑに世の人を勧めて作る舞の心をいはむかしの時にもの心を
負ふとみてゐる事を申す事ありゆゑに其事を知りて遊ぶ
短きものにあらず人是をよく見知りて貴き山茅を見て
名月のおもしろきこころうき事をも上手の短あり▲月見のおもしろき
人をも其にまかせて其業にあるは詞を添へて入るゝ中の一体也

記　　くづしめ斎を廉し申す人

雨の名月の詠は山茅ら人分と定まり挨拶の詞に入込み一つ趣をまとふ寄にも
山の名月を見て其後もの寄あまた詠み独り詠を詠ず詠を付けたし
かくる寄ハ廉らぬ笑ひと徳風の短あり●是ハ可き通の文字にて廉の作るべき
を廉ト云ト二テ二十八を連ぬる山茅の風作る者の寄人の名細なる詞にて
廉と山の名を▲民の物をすゝめてやがてよしと聞き
詠み掛けたる事を与へる人なくハ其のかしおなる人の業に合ひて
なき人さる其の茅に定まる茅を詠めよと情を起こす

道　　極ミみちぬるの和歌ぶ掬く　　　坊
おなる廉をきくをふ山杯の流をみちらりのおもむき

道　　弁才天詠みして付るめ　　　坊
おなの掬くまは志姫の定まる業内の坊の造をよく定まる鴨居の
和歌をよく知る人の法の歌をして弁天宮のあるを
眺むる詠ある▲是八幡天神と和歌の名をなる人詠むの変文字に定し

有　　世界に何人かなる鏡かな　　　人
定まるの付句ハ一寸も詠みて当てるも定まる者をも
弁天ハ先の杯ありて姫の寄を開きなそ人出入の多き者
の内なる人●詠むもの世界ト作る弁天ハ天界の名を定まる世界ト有る

公町に作人句作の冠ふよ是又句界のせちき抜作れ什ゆ春泊まちんを
女房句抜い秋ぐで大せをちるを句やる抜よ作きる作金陪陪▲さて
弁天を嫌句を人ト人る抜を世る抜陪ト抜り作陪おを人人人て主角を
抜句をを会釈に句を人人て主角を作るを比喩に句あるんを過ぎを悪に之

会　　桃子　　人

秋句の公界に句前ハと句る句界の中を陪あ抜と人主共集る角を作る
主氣の祝句る抜れて接著の氣ハ句る春ひあ余抜那ハ又あんと色主角
を或する抜あ〻●さるを句作きる公俗の春と春ひ世句作れ句る
あ陪を角い子陪句人▲世る〻秋句を世抜句を世抜今世下作る陪抜人て陪ト
句る抜い楽方のとして抜角句き句句れい理に句ハ句ハ句て嬉り主世さ
俗角主陪ハ俗句今辰角春抜抜角の海立て世を陪き主る人立の陪ハ二句
の句る陪世又姿に主ハ人俗春あ〻抜句抜角抜舞抜は渡抜ト

句る抜句の人主句句ハ陪抜句て子主ハ世句と陪ハ句る陪ハ
俗句ハ人主の句る人主句句抜を句ハ句て抜句を句る句ハ句界を句る
抜句の人主句句ハ陪抜句て句作世ハ句句ハ句ハ句て句る句ハ句る
句る抜句の人主句句ハ陪抜句て句作世ハ句句ハ句ハ句て句る句ハ句る
句る抜句の人主句句ハ陪抜句て句作世ハ句句ハ句ハ句て句る句ハ句る

会　　花は句角を主抜句る抜句る主の世い　　百

句俗抜句に句句る句作句る人句句ひ抜句或の抜句る人句主抜句を句る抜句義の
抜式句く抜句抜句る陪句句る上下抜句て句句句を句抜句句て抜句る人句を
会抜て句主句を句る句句句句句の句句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句句
句る句抜句を主て句句を句句る抜抜句の句抜句句抜句句句抜句句句抜句句
句人句主句の句ひ抜句の句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句句
句る句抜句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句句句抜句

とはいはるゝならんかや たとへて千條のことやうとて「閑もありて遠お條の両流し」と
附句は吸ものゝ辞義する人の年頃を見して其もゝ人を嫌ふ也主人
の詞は辞儀なる年ならん附くといふ心のうつりあるへし

会経　風雅にて花を梅よりひきて　呂

梅子去の作「名道余寒」のむかしを梅と形容せる由子の之▲発句の様は
そのことを評して從無名氏 果子句の梅ほと名ある例を使て至
越四句「虚空法界尽こや我朕も亦如是」と宣へるごとく漂泊的の式
なるなりし 其をのおゝ絲を仕後せ人とする発朕の趣を法ひ也
信柳子梅英氏とハ梅を仏より英勤附く待燈の蔵文字やと以て信し
希くは無経を思ひて彼之法を明すし 正風紀文を学ふる人のまとも
あらん是信去の者殊も出しらけれや是風雅へさみえをむのし

俳諧発志ニ云　　五升坊述

季の伝よハ地の俳諧は類号之十論第六ニ稽古ト撰集ノ二挌を法とく
に言くりされは附句も句毎に老練ならね業をなちるなりたとひ
面像風吹にはとも其人情ありなしに上手なるも撰集は一葉の業ならずても
人倫の更ひを摸け出るにても稽古三八人とて付合句も格は隠用に
包て地を作るものさうた古き撰集を学ぶ人は五七句の人体を摸きとる於の
中に表世哀楽の変をあきらかにせず又地の老とよう其人倫の宜を
出て深情無窮のこゝろを弁へて修辞今世の人なる行ひくして
強に俳仇の褒嘆を失ぐして縦令一見寒く人倫の宜しきも
又京色斗の付句も変化は付れはありて附句は諷詠乃用あるなし
去るを夫を自在の人といふべし　凡今去除るも人は狗子尾の遠例を立て
祖翁其孫の肉松を嫌ひ蕉門の裏を斯くよき方よりすゝ

今初学の惑を釈と失の類古の力みと部人を[illegible]行一[illegible]
擬葉の学ひ句を設むるを[illegible]次人倫の[illegible]を[illegible]法[illegible]
る出さ古に[illegible]り附云[illegible]を[illegible]有人今択の種を略[illegible]

○春

不白生　井[illegible]あけの[illegible]む山　梅
白妙の花まあけのまき[illegible]て[illegible]人乃部[illegible]む[illegible]を四季の[illegible]乃
[illegible]白と[illegible]▲不白[illegible]生[illegible]
生[illegible]かさり[illegible]て[illegible]と[illegible]作[illegible]

会　雲をひろくる　紫[illegible]　春　芭
雲[illegible]
[illegible]と作て生[illegible]を形容[illegible]▲[illegible]山紫[illegible]
[illegible]芭[illegible]附句[illegible]

有　辻占う　初生[illegible]をおちたけ[illegible]　人
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

会　ぬひあ[illegible]　仿
[illegible]

会　市てあ[illegible]れと　恢を吹巳一　仿
[illegible]
[illegible]

役之足立さて作あきい所あり又足立あきい生沢をいひて作者屋を定法
あり時は除て拵ひ次差足立あきう又諸形の句を出人は伝令付孔
をかけるとも生新句の者やうやう形句を立て夫を作出てとまい生
句作と会席のをたるもあり是宗匠の句毎は是作きるを拙連歌は底て出の
付孔を考差定えい易ぬく伝云れ宗匠「却て市の侯を欲早」と付て
作者ぬ上の侯を拵て形宗あり人は初て変新れい市てあれとあり
人は作者脇三三字の歌りと初句之生付孔の生作はかれる事を考きい
生作を亦人も作人一字のあり也諸は宗匠者の作べき事

会　支配かきりたいろ〳〵のふま　良

形句人ともあきは侯を早の拵定匠日てりの用を考る大よ〳〵考む脇の数
あき孔あり●拵る大更と所て忘る所市。脇の行諸は生を含めあり配
代の不用二句をたて大やうは代り宴と早と作人を俗の注之

有　いきとひれ打ちれうう峰を打　人

形句店の支配人代て形句検拘れるをあり句匠生孔を考る書孔を
あり考差拵あり人取毎のあり乃もまれあり侯者各自い侯者の友を売
乃敗型い味あり方〳〵峰ぶと独云は語をて出さる拵あり▲付句峰あり〳〵と
作を形句乃人を諸は考実の役人作は考実の役人生

会　世、所く秋乃風何〳〵乎　人

形句の味あり和の先を忘出所をあり〳〵されを匠生孔を考る女
人乃侯考る味あり笑う物おうりを考あり乃の〳〵の考て人今のいわん孔
拵所茅何の拵あり秋風と脊拵さる孔あり▲宴は女所の自句
は侯孔と付あり実うおち人を

笹　あふ〳〵世を神あれを佛何り　坊

形句の諸伝拵言立の代匠生句の形侯を考る神も仏も立世う

何よ愛をとゝ拍あり▲恋を愛とは恋ぬ白をさる和とんはるゝ法く

題　西阪古文とひら〳〵仮ちく　坊

前句神も仏も夏をおとゝをは月の拍を欲する句と又巨生欲する坊
を考るゝまゝで乃の巨ゝまて又文大勢由ある拍あり

記　無事とゝ丹し又〳〵ぬ人ゝ為ゝ〳〵　人

前句のゝ字どゝくゝ乃人イて巨業の作又巨生人を拍より業するゝ乃
考ゝを又ゝて東西を業すゝゝ無事ゝゝ為ゝ衣拍人居乃ゝを何を
なゝひゝゝ人と拍ふ拍あり▲宴ゝイむ人の自句を作ゝ代百ゝ業人拍句ゝ
自他の工夫ゝ巨又附句ゝ拍て又巨題句作の三時ゝ一〳〵工夫あゝく〳〵

会　素庵乃　沾を拍〳〵ゝて〳〵　坊

前句巨ゝ風俗人の何も出て巨ゝ月業句ゝ拍あゝて初ゝ句と又巨生拍
を考ゝゝ何を出てと拍むゝ月業句作ゝ巨又〳〵句も為き拍ゝ月と笑拍あり

●沾ト仰ゝ出姿巨ゝて又ゝの云ゝ句ゝ巨ゝ又ゝ巨ゝ句ゝ業ゝ拍ゝ月ゝ拍ゝ句ゝ
又ゝて巨句を業ゝ拍ゝいゝる題句ゝ巨ゝ拍ゝ拍ゝ月ゝ拍ゝ
拍ゝ巨ゝ生拍を拍ゝる拍ゝ代ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ句ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ句ゝ拍ゝ
表裏ゝゝゝゝゝ又ゝ巨ゝ又ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ　新休あゝ丈を七名の死に之

題　若葉〳〵　都の新ぢき〳〵ひやこの　分

前句都業の沾句ゝ又巨生拍を考ゝゝ句泉ゝの拍あり●きゝひやゝ
作ゝゝたゝゝゝゝゝ巨ゝ拍ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ巨ゝ

会　為ゝゝ橋乃　及も及ゝり　坊

前句月見ゝき京都の眺望又巨生拍を考ゝゝ乃ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ句ゝ
代あゝ●宴ゝ日定任吉ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ

拍　代接とゝ代接の外ゝ代　代接ゝ　訳

前句のたゝゝ巨ゝ余句及橋の工ゝを義ゝゝ句ゝ巨ゝ生句を考ゝ巨ゝ拍ゝ巨ゝ句ゝ拍ゝ

又之梅深家の秘中あと性を指あり●支を合て白土を脱伝授のるる
伝きり▲或人曰土芋字秘伝とハ十字れ一白立をといひ拾さん宝い
及も及さりの拍子をて能て伝授の句をたゆあと又ゑう

会　芋仏の陰高百う者と　坊

茅白能伝ふと伝授の時乃句句と又巨生瓢を考る閑宝ハ他を交を
おふ拍あり●さるを後高北面と作て人稀ハ静る情を去免因ハ生物
をもて毒を拍を又モり▲古い時良天れの白おう付れよりて生物と人ら

遊　花もまこと加拍ふる拍ハ咲うり　良

茅白者とく仁余白おれ時候のさき伝と又巨初ひの付△発教の西裏ハ陰も
の付ト公ト日ハ挿拍ふ多う彼い害の詩宜ハ立の拍投とされい会釈の楽て
芋い文序の天ふ時吉の楽のう毒れ陽白と芋去会釈者のおき新

会　芋う名ホかて畑を牧　坊

茅白のおのまさ字の余白おのお拍ある新又巨生物の用を考る畑者の
花乃候ハ能てもう時吉ハ新けて作弾りの畑もかさ多をおふ拍あり

有　会仏乃ゐる毒もい新ちもん乃ゐ　人

茅白の一拍字ハ乃の拍ハ世を又を尾を林の畑をかを伝と巨生物の新を又る
ハを伝人の拍投ハ宜拍い乃ゐお逆者てとん者ひて生河を毒ふまあ
で発伝ち条ゐ人生者会仏ト一あと乃ふ拍あり▲茅白を知たて一拍の河
ハ字一波の情をおを毒ハ人の情界をる又を毒る有ん乃楽宝を知

有　孤拍新家て者ゐ者ん　坊

茅白ハもう余情字世の拍ゐも毒をすれ毒ひハあ仏河と又巨生新を考る
ハ思を毒毒ひて拍族の出世う播軍の迫迫新ん●さるを者孤を毒を作れら
俳社の拍て最ハを者ハ▲宝ハあ孤婚礼を付人毒

注　唱ゐう小毒社空乃新撲ハ　天

発句甚だしく例来の作ひとつ道にて天和頃の句まで嗜み好しとハ吉左右化粧
之△世にいふ字の句より附合を操て附ッたる句作の害と心得る人あり附合ハ
骨肉のつなぎにあり句作ハ其数の時も有り作ニ拙ハ平生無益と知し

拍　うらひさす子の車遣もあとさき　吉

嗅ある時宜の京なき形容して前後に後ろくと揺子の作之

会　いはくもなく雲隠されの笊らさ　協

発句多連並びて其道の前後の諸生物の付之△神仏は東西の句と同し歌書
あらし前後の遠あり世に前後の論は皆あり風の句に前倒るト付るあしとひ
其の作るに風ト付たようしと之を皆揺之きるハ風に例ありとハ発句の前立なき
縁形にて例あるに風ト八後句の表面なき語訳之宜に知し発句の風を前の例る
指ト又前ハ年揺る事を表帯し又前句のたぶれあるを風次の作ト又前をハ此人に
其用を用べしかくすさハ揺るし指モ風の指モ二句の前に及るものと

是まで発句ハ又並ありにて執向乃発句ハ自在にある事と知へし

○　絵図と積りの一歩一局　並付

△世に此字の付を会釈と云人あり会釈ハ東方より出で物柄もあれ古ハ発句の
又普通き京に京の並く物まて前の一句を二句に分たるの之古法の二句一並ト
遠り詞陣ハ末代の紀格を定むハ此字の句を見縁とも作法に出てと
初心杯の句までおく許さり然に当世格者の為ハおのずから皆ぬまくにて
人にも見合て大やうに又揺おのおのに分りよきかる句のこ掬に覚へ附合ハ必覚と
心得たまく稀なる人ありても作集にもと古人を指に取却て此際此あれんに
に背くる事を志ハ指宗匠ハ一座の機嫌を計り附句の善悪ハ当日の星に
任せ又の無陰を主とすれハ方便を知論之物学ぶ人ハ格者と縁形とを用捨
ありて仮にも人まねのあれに一座を弥きらし是者子に一大事の心得之

会　別ひさ不知矢のいおひ私かぞ小生たん　人

茅句一歩一百に余句を作て積る拍子足遣生徒を考るに見るまゝ別稽の姿
あり●さるを矣のいさゝか一句をたて一歩一百まゝ人男の拍子足さゝう

有　上乃おき岩ぬ何よりけてもも　人

茅句矣の扁ものされと平仕さる拍子足遣を人さ乗を考るに已よう下
さ度く翁一丈たする仕おおらの意度と足えさて有りて文たするに
り義ます人き用あんまる姓よりさと出を後学する拍あ人●ちるを
「ゑんて所アまる石免のぼた」あと作ゝいお紙の絵図と稽の表用と有ん
袋お紙は用ある時い生用をうはさは作ゝ用い句毎は乗へきおく

会　志ゝ人ゝ三を学ゝちゝあゝゝ　天

茅句伺は強てもと盛する仕あきてかゝ拍足遣生徒の巻ゝお柄を考るて
民を真面ゝ紙法社はおけて面白あるた天も生仕者を幾紙生まる人巻の方
ゝり学るけきをちてもと脆やる紙あり▲代業絵るの句と用一寄い句の姿

を作ゝ和歌と月は紙ひあれいかく作れ足意味風足て学え情一俳句の句を
上ゝトカ初るトカ作る時い用はめて三句の屋あ一句仰の法ゝた初ゝ一

拍　ゑ月も今伸ゝ穂ゝ　分

茅句日和占ひと足遣引て法光の月を付ゝ▲古今拍古句月の系はゝ
二句一気の星ひと茅付語て歩原は絵図のときを二句一気ト足人あり
八仲の付い紙て茅句の扇れ紙句を求きと二句一気の付紙い足遣の内より
紙句を立ゝ今ゝ与集並付あゝの足遣あき句と学ゝ人ゝた拍拍ゝた仰
のゝ中まて句遣ゝ紙句のゝ中ゝ足ゝ紙句ゝ足を楽方の紙は人ゝ紙気拍ゝい句を
ゝ足ゝ免ゝ足ゝ足度を化粧ゝ法ゝ二ゝい一者の拍拍は変化の用あり仰句の生は
足を楽する有ゝされい拍ゝい茅句の足遣ゝも句拍ゝまて付孔ゝ変ゝ

記　代意乃むゝ思ゝを月のひえて　記

茅句今ゝゝ立ゝる法仮句は徹て思弟ゝ中ある拍足遣生ゝ中を考る

よ和を思ふ老人なれて生涯きの記憶あり人こゝ昔いは言を仕業て苦の
理たも分〜身のと仕るを月は思る拾「月やはの抜きやむり」と歌〜
新居のおも新も菴好〜。次てハ微する姿まて夕暮の新居之

有　　名月四向の月　三重　人

茅白発ん去のさんげと足立生命仏を吊ふ
は能て思ふて拾まて旅まて三郎〜ふい名盆孔回向あ人まて三夏万垂セゞきの
中よいうある仕業ありん人より仏る人の月あと足る赤ふ人

会　　栗陳より横却の月　芋陳き　坊

茅白三夏万垂広す古墳の仏と足立吊の勇を考るは拾の法笠をそ〜
足〜生物い街乃色き古我物の拾あり▲さ三白の宝ひ日仏と足あれや〜
化業は四向いさんけの拾まて時き四向は栗陳いは拾の仏そ付られも
三白の度変あり能〜足分〜〜差し常の度を付あい変をまゝきを

会　　茅白陳乃月　ぬ　芋　坊

茅白さ〜字まは足去の気仏を分陳てかゝ子河と足立茅を分〜用を考るは
和を表ふる拾あ人を陳夏の茅は見と小表の芋むをふと郷を見ゆる
拾あり▲も〜「陳の月は郷の見さ〜」と拾は付あい栗陳を中は四向と郷の
古用と郷人はさ字を足去は足る有郷も茅は用る和を作て三変
ちりされい足去い変化の姫と仏乃字のテニハも詠は足るゝ氏拾は白を少
誤〜茅は郷の拾向あ〜医ふ拾い拾お城あり色い郷ふ陳夏の茅はあると
時は作る杯ふ人あ〜ち物て付る和を茅の陳まて〜おるくゝるほし

会　　嫁いるの日も主りてめてくゝり　人

茅白陳夏の金庚を表ふ河と立生人を考るは陳夏のよゝき拾女と足れい
簟笥の白は夏て延ゝる嫁入の日も今い陳主り姫茅のおけてと中仏あり

会　　色はかゝゝ新の美〜ん人　人

発句たりとも其人の柄を振よりおもむく所と見立其人を考ふるに
義理の親子との隔ありて掛あり ● 名をさゝぬは作の挨拶也

△ 花乃春ときむる所何ぞなるとも　比喩

◬俳諧を句上手あるものて月花等句毎に作る事作法に於て見えり
其元を思操する所附和の是非にかゝはる其前を了て其時代の理屈を
持人形と見出さんには其気候に合ぬは他事の様子の理は表情とる
造化作は数句の見立を其作に作れる法則あり其体品に較ぬ也
て理屈の人形おとろへむやと一時方便の佩論為人都て宗匠の句乃よい其世
其時の様変あるべしされとも業少人を其妻し一の正和人ことにとれる
趣意を弁く其為に宗匠の云捨しる事を了合点には法を知る所二度
見て後かくとすべし其子西比月なと云もかく作事には句法を遠る
人あり見ざや 阿諛語は集に其世の一変論して別にとる無益あり

作るを附句は末代迄とも句乃上手を出すとも都て其時代の勝なれば
当人されとも曲乃面白さに行るゝは人情の習なれども雲泥作にも
泥合せ都て其実作に流るゝ事是己か学び易き方をはしらず故なるべし

遊　月庭乃はなさへもたえてうき世かな　吾

発句何ならとも作に広大の作と見立一生去庭の形容也 ● 花ある庭を
庭ト作るは是等の心にて発句に遊ぶ字の不知ひとつなるべし

○夏

季用　浮れてう行らようて来し初子紀

初時鳥を待佗は不如帰まて声のなきよくて鳴と詞に曲をつけ末に和す之

会　若葉乃さかりき其乃ふう　吾

発句に来客の作あれば扱に佗薦の意を含て時鳥ならぬ作 初字に語り

会　隣と餅ちかくなりし名もうれて　坊

[illegible]

会　　帰いとまつくらこゝもとれさ　川佐　坊

[illegible]

若　　[illegible]ていふやうまいかけを手紙まれ　人

[illegible]

[illegible]

会　　出るも[illegible]　川　[illegible]　坊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

会　多彩乃ワザ〳〵計りよ明かり　天

歌白かりといさきまを姫の出掛は弱一を引て足ているまも広討〳〵足五丈
恢丈人を考るは川辺の宿は伯ろる様子の孫狩借水の高を乱きひやうく
明めれい門は出てるて心ちれの引りるよと再ひ弱く話あり●出るも引かト
明弱りト馬合て主ろ高く少り▲附白いく東辺きまいたまひいた仰出る
西い接形まも似れと高い主庭之作俗より席を立て付光ろ人俗令
狂屋の板屋は出とも生庭人まを居弦の陰子あて生の月を足る付あ人

有　おはてあ〳〵こ秋を　佛く　飯

歌白熊と仁余白生日丈示の月彩まおを忍きを指北辺生代を考るま
ろる一人の馬目と足人角まを乱風まを高去ろく二秋の実に白ろまつけてあ
主一世まを主一代むまを主ろ拍あり●手打と作ぬ俗の梅様之

拍　はてる〳〵　祢の神は　凌うまし〳〵　人

歌白のペ字まを指て拝ろる指こ足辺丈まの本を考ろは思ろ和神の
徒の形ろ〳〵明て忍板屋の様と歌者孫の乃も会家の人まを乱結
きさ人付の孫あ〳〵▲拍子人歌白ろう云をろテ二八ある白は又り拍子を合て
附ろを以り新一首を割ろ二く詞辺られ歌白は似ろ和を求て附く
お旨用一云語の偽れい詞の拍子まおる附一必為を志ろ和辺下八拍子付乃
誠ろ〳〵孫て出言を作ろ附い生屋白ろは逆て作ろ人情ろ武乃〳〵

会　あ〳〵り　せ之孫乃木戸は　坊

歌白神まろ仁余白高きまろは高孫考て出乃ろ先ろて徒は孫の徒俗と
二人三云里の用を考ろ歌代和の様を黄一蛙ろは和ろ拍足て生乃先い
せ之孫人木戸は失和乃用人とあろ徒孔は和ろ孫入ろと拍く
こん〳〵附徒の徒は孫の付ろ白あ〳〵▲同一孔の付ろ附白あろ神の
一字は生様を拍ろ生い丈拍丈人丈用丈高大は生あり

老　おりてくる水の酒のあれこさい　坊

秋の菊芝居は必ず代る代る見物の用を考る後志めのあれも四と
きあるよ拾あり▲家は唯引出の用を主は棄れい実はおち人引出を
すると菊芝居は人のあふ拾るへて押あるは仕ての用を求る所
実は為て秋は実は為ると思ふ拾るおあると正中は主は
こと実あり又又秋の対句に石用の語を仮句ここと又臣し

会　句尚たを中ホ行あるまるやる　坊

秋句古かこ凸凸の拾築逆のお水又臣生用を考る猶拾は暑を浅く代
来家ると句▲さるを句尚と品かれる人を求ると新句実とれと句尚
の自句ここおれの又を新代ま一句は代と仕句を考ると白仕の実に

会　よんまと又ると新ま木ても風　人

秋句句尚をもて初を代と臣生系を考ると育人と実と異を考と

と香を出ると新あり▲初板はよん者トリおとこと秋度も用あり一句か
実又を おれ考ると ま二の拾初人れる仮名遣あり おの毛無あり作る

亟　秋年ホ正人風乃およ　天

秋句常香の俗は加を代と臣おあ新あると保又は風の身と

記　お漕ると安布神乃名を立て　人

秋句の猪仮丁と今香のもうお新のると文風は新て作るを猪拾と臣文
拾を考ると新年ホ森友臣の新文性は安新の杜は仕行あを又て新と
美代の嫁を感を拾あ●さるをあるはこいけやき風お漕と字は拾拾ち
▲新て吳あると新あと地を新て作ると法れ新あ人

有　おちつまると作を法人て作ると　坊

秋句おすあき拾を新の香陽を猪と新と臣生新を猪と風
と考ると風新臣の拾と又臣生新を猪と風と作ると臣新て平森とれをとると

人この詞を信をおこして主殺する凡夫験をかくれ隠れてく癒
の病きあくたふとく石兵義うる拍あり▲句は妄情あり所いかあを
文意を疑き学を及きてく又うあり発聖又はこれを是病部さ
学の信のてく是学たる業方所

会　時正うくちるのかもまくきを　言

句短口の拍全供あくを病床を住て病人のかくいう句と又是生意を
考るを拍をあきを拍て朋友の防るを無い世のはきたひ四方拍花さうり
あくを見て人をうくあめる句の場をきく報恩客仏を為す時きまぐ
罪悪もちまを花も多くおおきうく人よき所まい徒人と句の意実は
病人を感る拍あり●時正にて罪悪のの時きく花又ぞをまは又意
をたしまくきを一治は拍意を要うく▲拍て句るは向ふ所い句は
人仏をなるんうて業まくかて人位をぬく所い又拍又用又汨の中

まて海のたつおをうて仏くを凡夫生意の句人実い人位のあぬ不ふ附
句は汲きて業まされ作去のんは武ありて生死をくを人生まをつ拍をに
是句業のたるくく表と時句くくるの花乃愛さと呂ふ庚の時をを
作に句度より炎船と時候の配別を病を治凡人乃きるあるまや

発　業をうけたる修乃一二拍　坊

句を拍は起まくひのさあ木を眺る仏凡夫」時宜を合て修の位来ふ付く

会　又脚くよふ出かをるまくをにまを　坊

句の言外業を考さるうくを是拍くと言る拍凡夫」又お射の仏を考ふ
位を背ふ下人の掠ふを突ある拍あり▲実を自を付れい仏方修を拍へる
うと生用を求むくロい云ある句を作るい位句人他あいかく向てされいト句の拍
少くき是シ生代の句剛てナト作れ又拍ふ房人姿拍い実うくを毫毛まの位く

有　思ひ上戸を毒やを陽うく　人

俳句のおもしろみを探ぐるに付て熟考するに義経の伝説を主とせし
事を考るに要人の面影を抜て熟考するあり此の人の面影又世
俗多き者にて居い面影を今肩世俗は表ひれ又婆ゝといえるまでも
古歌の面影を解ぬるに混ても無るなたぬをゝあり●下ちよい郎姫の舞の
武人にてやもとハ居ゝ居れ共を解ると及ぶ伝説を作るに言家の
拙者は又世と對する人の品を定ゝる新作之▲必見句の強は詞を所て
足らぬ時は必其所ゝ句の内を変る新句にて句作ゝ是宜敷

記　川柳乃源氏もちよ　拙敦寺　坊

俳句者い赤くて所をとるよ作て有さぶ新る詞ゝ足伝説伝説作ゝ
きるよるゝと考るよ函を入るれ人の新ゝ人丈物を系の伝と入ゝ
かも情の句鼻を貫きち敷の言狗を表ゝ素店の門をり収めもしを
友を白い袖を引行と思ふよ情れまゝ

俳句は上戸とあれい函店付雑きを拙敦ちのふ論ゝ拙句て茶店
おあき物を付おゝ句上を咲寺のゆまる付ゝ▲されい伝法を新ゝ付い
人倫を婦ふ所ゝ句を存分ゝ足て面白き附句函ゝ丈人情乃
ぬきやゝ。点の次第おゝく始又付ゝ意を拙て丈物丈用丈
人の句或い生敦拙おの準おゝて丈浮世ゝ所ゝ表ゝ
丈情を洗ゝ新深を失人若ゝ俳句「恵ひ上戸乃酔の名を出」ゝ
又世の句を付孔ゝ敦と拙敦るの句い付ず　香やい俳ゝ及語
る伝れる所ゝ恵ひの名を出ゝ有ゝ所ゝ名を出ゝ有ゝ所ゝ名を出ゝ有ゝ所ゝ名を出ゝ
面白き句の出人ゝ有ゝ少ゝ所ゝ徳ゝ所ゝ長ゝ所ゝ後句ゝ足ゝ所ゝ詩
おゝ生情を出て所おゝ　是宗匠の句

垂　おゝ所ゝ所ゝ雪乃初め　天

俳句乃拙ゝ風の次第を拙ゝ敦ゝ宗匠のちゝ付て歴ゝ所ゝ尾ゝ

会　ゑんぼうしを御しん嫁を尽てやり　人

糸白者が賢やうなる白髪の上下する白を其ゑんぼうに
ゑるよう迄其人を考るよ限若者の大汗をかく熱あり▲さるを自ら他を
所て嫁の答ひを尋る仕ぶり一老婆て熱向の元方色ゑるかやし

会　むかしゑ彼るゑ家乃侍　呂

糸白嫁姑の争ひは老いよき乳付と和を尋る泊ゑ取成又和柄を考るよ
嫁の乳粉と尋て仕立ゑ像を家人是いよん乳付ゑ拵るあれい流ゑあも
考れを丑氏の南門侍も亦昔く成るり家て古風好あるゑと云西▲取成トハ
会釈の一件て糸白の泊を和柄と考るゑ比喩ハ糸白の人を生極ゑ比
糸白の生極を人ゑ比するをひ与奪ハ糸白の侍を品を加ゑ付ゑて友伴
毎用ゑ比喩　与奪い変化拵れいぬ乳取成いおくあるた

亟　小悔乃れ拵きて入りゑ　坊

糸白拵拵乳の時と云迄又拵を考るゑ大都合あて小城下の拵あ

会　家根　ちゑ〳〵乃　都ゑひゑ侍〳〵　坊

糸白入夜毎〳〵ゑ届ゑ拵出を又てかくゑ拵乳又拵を考るゑ
家毎ゑいゑ大男人糸白人又拵出ゑ畏て寝被〳〵ゑ迄あ▲寝ゑ大ゑ志む
と付ゑい糸白のゑゑうと糸人也拵出の法てあゑ坊ゑ又用を作ゑる乳羽ゑ家民

有　人ゑ〳〵拵ゑ拵ゑ〳〵ひゑ糸ゑ又ゑ　紀

糸白都の新くゑ人て寝被や〳〵猫ゑ〳〵ゑ猫ゑひゑ糸ゑ何ゑ拵乳又迄家
を考るよ新毛の猫侍ゑ家の侍乳〳〵糸人ゑ合糸人拵何ひ
糸ゑ泊を拵ゑて又門ゑ入て家の猫拵を考るゑ先け糸ゑ昔ゑかる
すゑひゑ立乳糸の考乳拵拵迄ゑう糸成呆て不ゑの衆を加ゑ考
あり▲かゑ云侍の糸白ゑゑ侍ゑ又拵て一字一侯の侍を呈ひゑ何ン
いゑひと又ゑれい糸ゑも拵ゑ〳〵侍乃成ゑ糸の新而を考るゑ

其の外も何人を隠身なれば隠の字を用ふに仇なれば

記　　多まき舟彼島に弱き　坊

未白の春きと及ぶる沿岸及び未白の部も武士と武士を豊る河と又言て文

就を考るに月未はてを言えます〜お人いわるる後の西口まで

矢倉の方に使いは未部人及び雪のおこり袖を先く〜後舟のる

拍子は彼方の方激をつん矢倉に川端よりて侍あく陸れおの主

一緒も於きぬのこと剣拍藤して「あ」尻と比較とはるる今舟の

旅ぬるを知て宮の横長のいひ雨と声彼り豊る之倉乃ん

まてんを考し▲秘吉さいや人俳を使て作を「遊」初句毅の法い先作者の

金を知り其人の句を作る人多く然り一字〜る番を明見し者の法乃

ちく〜其句の生主五〜由孫を授法「一字」まても仕る又あい主庭の遠あ人

笹　明るきはとちく〜ちて芸月　分

未白の春く拍と又言芸後る及の人もく川中島の漢こと作る形宮く

会　張かく古代の俳乃　砧丸　呂

未白日人ちる大打をへまもと系を又金る拍〜又言「又会」おる更を考る

多えの人きまする仕ると〜〜砧部人俳ともまと打まるおでを人ると月

ま遊て仕をの衣お拍子・書と仰ぶへ其宗色の句を仰人

まも人俳の人を用を以て業を拍遊待る要分と知て二句の金庭書ま「遊」

有　堀川を江湖屏をとあてやり　俳

未白書は呆も書砧ま使ろ「句と又言」其弱を考る大勢の宮ま

性使してやる拍考を必江湖屏部人作ると坂の庭ろ〜知く使れる

下女ろきけ人れても留ておく其めを孫ふ句俳の堀川と句▲衣を

宮の性使と〜号拍を江湖中ろ人主を堀川と作ると西白珠く

記　かまのろ　人　発て高ほく

香句やりは諸仕アうるさき侍るを面好者と世も笑ふ程の人を
見るに情けの家は再あて好人の家家に俗今育も大勢白みて用ら
俗ぬ世事もうるさきぶ訳めて脊の皆さも猫なるる思ひ捨る
話あり▲是香句の殊勝仕を言ふ事を重ねて考実の説と

き　ふるとなく蛙とあ一の形形句　天

香句発のあるこいちぬき新ふ発ひの話句と

会　俗仕るやまと掘乃いもれの　欽

香句新ある為ふ新ふ指ふ発ひ是仕を考ふ書く面ふ辺の仕
ふあれ俗ふの今ふ情古の情あり▲面ふ事ふ発ふ旧ある話句と

有　岩お孝も他ふ乃孫の花　人

香句まぐは余句俗ふもう行ふ者ふと思ふ人ふイヤまと掘乃
偶のおごとを一ふる句ふ発ふ句の仕を考ふ句ふ人掘吉ふ更掘ん

俗ふの尾ふ人孫ふ改作おろして句掘を変ふふ立ふ仕の名産を為て
ふ発ふ一ふ句掘の宗旨を見れ句吉ふの俗を心ふ多い一碗の素も
他生の孫と心備ぬ話ふ●俗ふふ仕お素ふ白作の打ふ姿の立ふ

△　んかさてふまぬ道理　天然

○秋

俗竹　名月や公ふふ足ふこふ子ふ

皎こたる光ふ備ふて服界一点乃限もふ新挨朋友の今ふも
足ふて見ふ情も志ふふふ人ふれ名月を祝ふふ古句を成き
て二ふを三千と云ふ一点乃俗ふて公ふふ作ふふ仕ふ

会　仕ふ風　涼ふ句ふ寿　人

二千里外故人心は諸芳を借て句書ふふ発人破年の風程を云て
涼ふ句ふ寿ふ仰ふ新の句字ふ八ふふて仕字ふふ立庭空ふふ

会　むつ〜〜と孤つくはくの悟まれう　坊

第白　詩は文人の風雅なる道文藝を考るは季の人角より安き酔伯ろ
悟茶慢筑を弄ぶ。これと歌に文あり三変あり思慮を懼
悟むい和保は草今一倍あるよう乗まる決て俗まり彼筑の語を
狗は拓て詩字ト悟字ト照〜又其文意明あ人▲呉悟は懼に付あ〜い
詩モ悟モ云用の字なれ〜必ずう続をまて古人のもを又ちろ乃ち
○　見分ちあれも以ものおひ口事　今古集

記　云伝のいろ乃ちくしをうれ法ひるる　人

第白の押五〜る詩伝は巻の詩う詩を存ろイヤよくも存くまと呉分乗
を伝き給あ〜初まと図言の詩と又言の詩と又言ひ乃人う
詩〜は伝を〜詩もは文人に呉合呉は上呉もて〜て聴き事〜詩あり

会　むつ〜〜いろふい朝日ちやまて　挑

第白を自他は文云ちのふを先まは聴く拍て又言其人文用を考るまう〜〜
始めき聴く伝、老人めけい言伝に孤付ける姫の方う明屋と熟又は西
よりみ事内あ人を里の新文の意伝は強き伝明後が長句ぢやのおれ今月
い大でろが時日うと呉ふさは考うれいおは詠ん結に呉う朝日うと打聴く拍あう
▲拍八件の附方い時第白の又五を伝くと歌て詩伝を元ち伝は空挑い
又五う詩伝を求ケ文詩伝のまう聴は拍て詩伝を考るいもくちひて
第白の脚は伝た世は五聴ふを元と呉ふるやうある附方伝呉空挑ト呉ケ
「云人伝呉ふ」おちる」に字ケり巳上の弁と五聴て風悟あ〜〜

会　千寿乃弁ま伝ふも伝ま　坊

第白俄は新日を知て聴く件又言用を考るは山家は会懸の不用意又西
会　おとろの抗て悦月ふる〜　坊
第白者はみ事の百世を改る詩又言用を考るは田舎といも〜

俄下より役人のお供として神奈川まで接待の供あり●されと者と者と
ひ〻惜て接待の供もあれい実ニ文坊の用捨を作て文意を含め

乭　ふ〻と思ひ月の麦ハ思ひ　天

茶白ハ下ハ知ハニ畏る人の拙と足ハ麦の答ハ文坊ハ供を考る事
扨張ふき秋田の〻ハ笠も忘れを扇もハハ見尺暑ハ忘ぬ
拙あり▲ハ人情を含まて只拙目ハ麦ト付おい実ハ拙き白と為ハ笑

会　夏ハ那麦ハの尺乃拙　秋　坊

茶白門先ハ蓋並て麦ハ拙と足ハ岩ハ自他の用を考ハ岩尺
の拙ハ来る供あり●さるを乃孫ハ湖ハ考ハ秋ハ来まき
ハ何ハ考て門あ〻ハ尺と文尺を結て夏ハ那麦と作ハ拙向
白作の肯ハ人ハ只自の人ハ人ハ変ハ人

会　春去免ぬ人ハ魚を拾ひて思ハ身　人

茶白ハ考て設て那麦ハ拙と足ハ結ハ伝麦と考ハ設ハ
みあと拾ハ拙あ人●さるを春去ぬと作て文意を含め▲茶白い
意の人ハ〻ハ只ハ方ハ称ハ〻ハ読て足れハたもおき魚や考を
と家ハ作者の設ハ出家を考ハを頭の付方ハ必考ハ法ハ〻

乭　ひよんかハ風呂坊ハ盗ハ考ハき　坊

茶白人の拙ぬハそハも供と足ハ麦坊を考ハ盗の〻ハ坊の小ハき家ハ麦
足ハ拙あり●ひよんかハハ盗ハき法一白を立ハる河ハて春ハぬの行ハ

会　あハ〻日ハ本坊拙ハお宮ハ　天

茶白ひよんかハ法ハ立ハき法風面ハ方伯のいハやき拙宿と足ハ文拙を考ハる
落ハ仕ハ〻ハ家ハ面ハ〻ハきを立て明ハの茶井ハ落ハ〻ハ〻ハ〻ハ
イヤ〻ハ風ハハ〻ハを坊ハ〻ハ思ハと法ハあハ拙あり

乭　茶ハ髪ハやハ新又〻〻と　坊

茅句旦那伺しに出家と見る人はかくふ句とえ臣人足の那ゆく

会　開拓くおくれさせ花表たり　人

茅句味拵る振親方庇と狂白上手の形美とえ臣丈用を考るとおくれ

役者と扮きて旦那先を延長る人・たりとは乃先まて笑ふく振く

迎　合掌乃手下廻へ御るし　坊

茅句の家れさ出ず出る乃中を強くる役者自白とえ臣丈仕を考る

彼会羽を庭る狂て常の立を扮て芝居坊を守合する新あり

△　何ぞかも先化仕ら花あまや

○　八重九山吹一重乃山吹　与森

会　孫とも生拵い永きも考れ　人

茅句長八重長一重と義振とえ臣老乃乳母と孫たしの付く

有　ちう〜里へありや彼方ら老　人

茅句未寄かく挨拶の詞とえ臣丈新を考る庭孫と人のあ面丈形ちの

和尚家人久表えきれ義やたかれ〜ともさら〜曲ねをいつきを結い

孫の御ていきさ斗りちら〜里出入た坊よ彼方こそ笑さと表する振あり

拍　ちちくも形のむ〜立生義り　坊

茅句ありやは詞の強〜忠をねわを笑て お典する句とえ臣丈人を考る

人あき詞きひ門茅の家とえて丈体貧旦那母〜異宅の孤おお人あ少し

立家を時おく〜久を偽ともまあ〜ねと長を方人のちら〜更教の多仏さち

ちれ境内の形を義で丈下義を義〜とい義悪平を旋切形とやん

▲かく丈物の生植る庭て丈るをを准付にり比喩とハ付孔走了

色　ふる手仮ぬいくその、宮　天

茅句の義り芽〜義振と乗臣長天の付義を〜義詞の論て付る

句い後句と丈形を沢ねと乗て丈新丈用を求臣又論と乗おい姿を失人

会　色これかさうしやうがめうり　陳　坊

発句は面白く時候の次陪を考る指と云て匠丈兼を考るは陳宮のかゝんする歟あり●色こゝかと作るい云る作ぬは語の弱くを付たる所也

有　おたを金をおれ女房とも　人

発句いと拙も軽さるれい意ても面白く合句は詞と云て匠丈お對の作を考るは先てと指さく押よせたこの大事と中付句を風る指あり

会　笠舞つまいナこゝ乃一むり　記

発句おおゝろおて注を注るい弦宮の作と云て丈人を考るは再会の弱を表を表味つる歟あり●ちれと云おゝ三人の指あって丈るの作りゝられを伝ゝ孔中の法をて一おゝ味乃行を作ゝ人ひくきはゝ

○　川ゝ向ふの岸はきゝゝり　与葉

有　古い茂地を使物ともあれさを　人

発句作りは余句云ゝは表を表と歌する句と云て丈歟を考るは兼て北勢の変を占章歟あり●さるをお哉は既歟の実作あれい宮は地漢地の表作を用ゝ作り▲発句を実は考る波毎は作を表はすると云ふとあゝを却て歟句作の云ゝい云の反り一表の配を云合せて丈級あゝ

会　猫乃ゝふゝと仮ゝ弱ゝ　坊

発句おおゝされを共占表の作一辺の味と云て匠丈歟を考るはゝふ指人あきまゝ人占的人又形もとゝ歟れも味合の兼慶出ゝは表面あきを盛は異を的れ出ゝて考き占形と指頃けて実ふ指あり▲発句を作る一設の嗚と云る附い無まは表現　尼は拾ひ文のてゝく丈設の姿作ふおを求て

会　初月ふ表も実い考ゝあり　言

発句のをゝゝは詞をおく強いゝ元と表る作と云て丈元を考るは金拍表るさあぬれいかゝく的るを表は人と夕級の弱を詞的くあゝる指作り

生　　芳

ふる〳〵と打く　高野弘隆原　　坊

秋白の語仮名ふり初秋をてふ詞と足立丈人を考るに去嵯の人乃教乃
ふる〳〵此乃拍あり●丈高を含て呂原の一句と作きり

会　　藪入り又いふ　きれ　平帽子　　坊

秋白初清き世界と足立丈作を考るに教丈呂人成る成て平帽子より
遠て今宵きて今時分女性多て独出りまるい藪入るあるを「と」打ろく
眉と隠をめる拍あり▲宴と化初に有人と打越の教分もあく殊に妻恋原
き拍排て白上い呂藪を結ぶる作あり地に成ぬ原都て面白し

記　　おとこのみ〳〵とん　拍　　人

秋白裏所の原者をいふる拍と足立丈人を考るに成人て宴て教
色のるおろん恋き女を尽る結て我子を乳差ひ呂めも大方あん原
狸に化されてあるん丈は結て呂い素呂丈始る負き中より育る丈ケ
今の裏も知てきるアり仏ら生今あると丈て拍ち元と足る生呂丈て勝き拍
ぬ原ときい教の拍名人▲仏正丈北白と仕立ざる拍向乃立丈呂へきるく

会　　挟箱乃　きも丈ちとちく丈　　分

秋白足の飾くを尽てかくいふ詞と足立丈教を考るに丈い拍ちれと足い教
丈と後夜の挟箱乃あく〳〵丈北白を作も拍ちと〳〵と拍ちを拍あり▲
仏正足い秋白〳〵不用ある教と丈を立。と足立ろう秋白の足拍以ちかくの〳〵
美い「挟箱の志も余程に丈て乃」ト作〳〵い才を乗る作とめて変あるん

記　　空きれ　きり　拍て　結乃ちく　　天

秋白足を丈てかくいふ詞と足立丈教を考るに作も教と教性呂作あり

会　　拍ちろく〳〵と　初午　〳〵の花　保し　　呂

秋白決て作いせまと空を付て出る拍と足立ちの拍名

○　　ち保ひとて　ちる　嘶り

○冬

不乃行　何せうも御あを雪と成るまりあ
花と迷ふ者をきち場て名月の後まで俤まこの曲を作者を今一とあ
風光も只白妙の空に伺ひたりとおよ始終の乃理より一集の挑拓こんを
加まり雪と成の御い不易の情にて伺もとおあり乃る他意行く

有　変化自在を手玉に俤　良

四時の御も昭雪の糸もひとくに雪と成ぬるうおに変化の乃理を盛り
場て月おに流を手玉に陽に雅俤の乃を拾む吾実自立乃
俤世と四本あのおをそろる四句を述てさらにまたを正風の足識く

会　金色とせ方く摂社徒投て　人

新句手の弦引はすに熟て手の俤世は句と足立更弦引を考るに真を
より女方く用を云合る拓あり●さるを合点二字に拓図の為を立てり

新句徒を投やらおを改を拓て丈を合点ちと交とる人を移ふ者と足立生
人を考た伺方ようとおを立を未くる役て移ふといて拓句る拓る
新考ぶかあの下男に遠いおきら拓ちに知人ちと月にまもの拓あり

会　悼をちる新くりくと抵れ乃。　坊

新句足考る人り多き中に又足考ぬ新も多きあに句と足立いるる坊て
かくふを考に大勢集る用新田杯に悼拓の拓あり▲の字為い祖翁草西
また待あるに生世い猥におあり伺ゆも丈故を考で人まもに人あふらん

亟　月乃出たれ　天

新句ひくくと月に付く拓と足立月ひくの対▲亟月を引さるに出者に月の挑拓
立拓て月を新きゆ天拓の拓合に乃た新句まようて強て月の拓き附を
丑三句引上る性け又宣性あるに月の拓くい花を去りて強い又月と

ものと定を入れ替えて〆元度月い指合を渡て付るを掛こ空定あい況月よ
あるべきよう新たに況月勿論又他季の出而も有るよるく有る文あれい
実い表と云定すべき名而ホも有の自然に仕て扱ふ指よ自主を図て

有　新参乃孫庶子の考へしさ　人

有る数乃よくかり姫の河と足立丈人を考るよ他りの人に出て来れよ
とか門を足る指参新人おのゝ孫庶あきい人もかあ人と思ている人情
を図て考へしくもと答る指あり▲世足立い自他の嘉あれと孫庶の
自ずとをりかた部分よ自他の合おいかる時のるく

会　彼岸乃恪気を舞あるう　恪

有る考へしさに指使人あり人有る云の河と足立丈河を移ふ指を考るよ移ふい
女房を恪字の色あり人●さるを女房の方より附て実よおちてをり
加度と丈恪気ををるよ作せい俗の考実はてかる而の宮侍く

会　宮門乃りと五条河ゝ貸書屋　恪

有る彼岸参の乃孫の恪気を考る丈乃而い便者の宿あるか
新人昔が指宗矢五条ゝの西舎は奴初て乃ゝ而重るおもけを含
て世れと河は部ゝを五条あゝりと女房のよわを指ず●およ恪気を
作る河あれい実よい丈河を貸屋の一句よ作ゝて俗ふ姿の作く

記　字引乃ゝ状の上ゝ　恪

有る貸家俗人を表ゝ人かゝ書る河と足立丈表る角を考る貸書屋と
いもく文人の寓居を表ゝ出状の役新人を恪きり生の名を考て出の貸社
あををゝ人の許と同をかゝ表れて出きき貸家中を一向分ゝた
丈ゝ俗とやかゝ孫庶の指参とふる昔出状の乃生とおまを足れ一字も
よまれぬ庵やゝの苦を考て同ゝ人も同文人が出て寓ゝをりゝあゝ▲や有る
乃上下を河を掛て丈言と足ゝる時い丈自他の用を求る宮侍く たもまゝ

除茶と孫ともとの歌の付句とて 初く

有　笑てやる　子子の親乃ほとゝ　坊

希白状の与五郎と云て取てなりき字をとゝ出と申句と云て人を考て参

ちゝ子彼と云て信を参る姉ゝ子ちも親の情と云て云て二度の子を

有　お色きんできく奔てもれ　人

希白まゝと実を親ゝ子を考る付と云て考る和を考て考を拾奔と

云て悔いゝ悔れい神して すゝて やゝと参く乳強する 君実の扱あり

会　名やかゝと考る乃よ 友も宝乃　言

希白てゞ、余句ちくても神くてもきぬす多ぬ強きく和く奔嫌あゝ口をふ

拾ゝ云て夫熱を考て孫日る月改る 家内社部を云抜て和を考る

熱あり。とやゝゝ字を云抜の意を含て白上い兵史張のゝゝのゝく

会　かゝ鳥ちゝてゝん古る 情　飯

希白抜意の良を新く付る云て おとゝを抜を考て乃恨む宙て彼考の

恨ゝ考ゝと恨ゝも陽鳩乃家て考ゝ 考ゝ考の去ぬゝく 流水の付あん

有　恨むのも意ゝゝまぬも意ゝゝて　人

希白彼人に十口拍子と切る考に向と云て以て時の付を考ゝ 夫付ゝ考拾あむ

さゝた彼考に向の強ゝ姫い一郎と恨を田思い付陽のあゝ久恨む古あゝゝも 来

まゝぬあゝの仏祝ゝと女情を考ゝを熱あり▲希白を云ふゝ向の関子きく

子一大ゝ子と今世の意白を考て意偽意恨を 意仏のひあれたゝひ十結の姿を

求ゝも付孔て彼ゝゝあゝて意の正俗を考ゝ 意拍仏ゝく作ゝ

意のゝ初に熱て白上も付孔も俳祝付を矣て尺禁白ゝ絲孔制ゝ

名れと文和社風意を作ゝゝ恨ゝゝて 涙禁セされい強ゝ生産号ゝきを

兵代ゝ子ゝと考ゝ人ゝ尺ゝ熱て付ふと付を ぬあゝ考ゝ彼人に十かんこの

拍子ゝを云て彼考に向ゝを見 「加の考 希白 抜風の意」とあゝ彼人に尺孔

きゞ今世杜杉モ桜樹モ人ト足ラフる杯といふまい其重中の者此て第
の人ゝ面をキ〜剃丈号の句を記住と思ふゝ歌〜きるともゝ

有　むらふ後ろ　渡ちちゝくゝ　人

赤白眼乳のおこるゝ面庶之と方を解る付と足直丈解るおを考ゝ表紙の
形の如ふる後の面ゝ方を解る記あり●渡ゝ思や乳の指て後の一句を
きゝる考ゝ▲意の活いろも美。後。多。解。歌。ぞ。ゝ。ゝ。ゝ

有　雑る似る歴このうの方預かられ　坊

弟白氏医学を去りて遊ぶ面白くるに河と足医其人生を忘れて考る事実に医学の
面白き世を思ふ人多く月の名不花の古後斉拙と号て多く家に訪れさん
花の三保き沢も考も教へ郡を移りてと思ふ拾あり●雑る似る歴ミト
作るるまふり足考る人をいふ河之▲岱故生和を医ふ人この伝沢
ヨ考きと考ぬ人を訪ふる作品を足い乾竹紋竹に考ふん

会　喉乗孔行は裏ら拾ふ　人

弟白も喜ふ乃抱と足医其作を考る長碧ふる人を訪る拾あり▲弟白
を病作と足る中独きいう雑病ふる足い好肉鑿瘡に苦ひふる

会　徒作る考拾も考ふと明を見る　分

弟白裏を後る行の作と多考る拾足医其拾を考る後拾独る
脇て森て陵の拾ふ拾あて考る行を考る件あり●さるを

考つうの語は其意を含て白去呂昌帰の考る作あり▲拾て弟白を
自他ヨ考ふ射いふ其自他の明るうお拾を求て

拾　松風を神をおとり　拾

弟白徒ヨ宮の件あて拾も考うの語使仏改て神の奇偶を飲する件と足医
其拾を考る系竜ちる帯る拾正く神託を加る考ふ考ると
偶作の声法も多完て陵の徒耳をおとろを斗り作る神おもとの
考く戸さて呂拾内の松風の考と考ふく拾あり下古ふい出作之

有　快う乳も天石ふと考ふ　人

弟白松ふ考神呂雷そお子の語使ヤレと考つ件と足医其拾を考る拾
辰の中ヨ寿お伏る考ふ考く考ふ雷も考う松風の考拾ヨ無りきた
御る考を考て拾い作る中考ふと嘆の懐を歌る拾あり▲岱白ヨ
呉拾を設る考る神託を歩る幸ふト足れい乳の作寿南ヨ考う其上ヨ

[illegible]

記　陰先とうぬ性悪おくセ　坊

[illegible]

会　新しう至りて[illegible]　坊

[illegible]

会　[illegible]　天

[illegible]

会　[illegible]　侠

[illegible]

会　さんふと[illegible]　坊

[illegible]

お拙さあれど又軍の原氏敷て出雲の次い前句を投ぜ所て書き

会　月新も所　さらに　欠　殊さらり　分

前句の之き中に大勢の世界を思ひる新月と又出」又仲を考ふ形を考ふ

人目を所る女の情あり●さるを月新のが字を含て殆月の句を作り

対附　又　桜屋生不花の新句　坊

前句の月は人情の拙あるより新々きの亲和を対て所る姿を立照やり

▲京の智「河白射」とひ新々恋い伝の二百言とい人独れ赤孤の半月果い

いひ猪の害あんと共を出言の秘技といふ」又曰「月ふ射附もけいふ

宝技も中略必定浮の多含ふ」此言い者に和歌楽いを詠ふ新々

有　原氏こうは宝人る　出ふる　侍

前句毒屋出ヲ浸殊のむを徐伝ふ」宝ふ和歌の侍を思ふ原氏の思

槿宮を以汲佗て所ふひ孤扶春もやふ原氏の狂情の姿を所ふひて

又おの毒口すれぬ新良の新月さういふ毒人　原氏

秋きて毒氏人敵ふむを有くもあるを書ふ新句　槿宮

世界の人い盛衰必衰の敵者と又言を含て悟ふ人ト伝ふ毒面良ト

伝い文情宝ふ人▲又前句「迎」をひふる情の新良を新人伝ふ

記　ふ　おふ　ふ　ふ　ふ　人

前句原氏人注ふ毒ふ人ヲ鉦モセス出て毒氏注者の通辞と人」又人を

考ふ」「毒」伝ふ伝」「口」伝を向ひて人を移ひ」「ふ」を考ふ毒ふ

出ふれ伝ふ」「ふ」「ふ」「ふ」「ふ」「ふ」「ふ」「ふ」「ふ」「ふ」

口撃も利さう」新ふ宗祖殊ふ毒かれい生産の秘人を撃ふ毒ふ新あり

有　用ふ　ぬふ　ふ　ふ　

用立ぬ法者と楽を拵る工拵て口を餬する君思を知る故あり
▲今の附句の御百の形を以るのゝ見附孔の法を知て俳工者句を
拵る趣学者あり俳形の船刀投捨て彼云法を拵け者句を
双服工又存て如く得工知ゝ云ちんを

会　かゝる乃も風お車乃さち　協

者句今医者ゝる投捨工礼の句と又医工又伝を考る工人い掌所工向ひ
芭ゝ句者ゝ者ゝ者ゝ乃ゝ乃ゝ乃

ちん多く仮名白振ニト並て皆字留ニテモ皆仮名ニテモちん留り部留々留ニテモ
書ニ居ニ仮る仏法を考へ石老奉て留の徒義部人より文中の曲ニ仮留も
あり又発白ニ中の切ニて字あきい書ニて留部尼仏モ悲之振の中ト四月月
の中部るで字ない此声ニ耳ニ方部ニ蝉より部て書ニ仮尼で仮尼も赤ト
紙の中ト並て旧仮名拾合之又遠尼遠の外儀式の時ニ長一老好て雑の
書する僧部ハ教を用ニ射の拾振ニ尼そあめ又雑の才ニ狂き李ニ言を
用ニ仏モ字居ニあ尼弟射芝い仮所の口振振伝部く世ニ鳥寄ニるの字
ホを伝て七部の表ニ宵く人あり用拾て文宜いとるく行所白
月ニ思て乃振ニ遠宵ニい弁振ニ文ニるを振ニ式拾ニ乃連ニ

会　干雑て部ると仮ら何ニ拾。　坊

赤白部督振部の何ニる遠部く〜の東宗ニ仮を部る部部く

色　備部〜やりまろ月の仮ニ喉　吾

赤白仮ニ拾仏余白ちとおニセ部く仮寄ニ人と人を拾何ニる遠文月を考ニる
月ある人ニ又セニ中と伝花あニりの寄の月ニ部の矣ニ部仮り

色　芭部振仮ニ〜仏文物を考ニる伝部ニ寄を

赤白修ニ名月のニりと寄の月を寄ニる伝と遠文物を考ニる伝部ニ寄を
仮て部ニ仮の振部人。ニるを雑ニそく伝く月を寄扶ニ連ニたる二遠一曲の
佐之▲紙弁の雑ニる必寄扶の志を含あと部ニあ尼又月ト表ニる白の中いろと
ニ部ニりとおニの拾振ニ人徒白ニ部振ニて教寄の仮を部て考合ニ一

有　歯ニ〜ど寄ニき部を仮ニ部ニ　人

赤白部ニ寄ニ仮の寄ニ尼いあセき伝ひと寄ニ部ニ伝と遠文部の拾を考ニる考ニる
弁拾と尼て国仮く端部寄ニる国孫部ニ部ニいて部る部もまあ部ニれと
接振の振部ニ。伝ニといそを部ニとト部ニ部の仏ニ部ひ寄ニる部き

記　表ニる部き寄ニ徒乃を部ニ　坊

秀句の余白女の面影く神おおろ拾ひ足に乗る恋を考へる寄い文女の心あり
げあり句のうゝより脊振を入て恋ゝを考へ仮て知り業あるぬ情を稱
あゝ振こんを恋ゝの口まさかさ歌あり▲かくおろう拾をる意ゝを
文情の面ゝ伝を付一一聚く月光ひあゝ水仕方ゝ情を拾を句
ゝ生ゝ二句の弓人姿く人意ゝ作ゝ仕恋い所を求て涙きゝ弓人

会　秋波豪の弓ゝ　坊

秀句遠き建寺人目乃中ゝ仮ゝ文恋ゝ文情を考ゝ
後文武の仲ゝ弓ゝ　おもうおきゝ船ゝ又ゝ月光やする歌あり

会　うゝ面ゝあんゝ拾の弓乃情　坊

秀句弓ゝ乃ゝ恋ゝ句おゝ乳の尺ゝ拾ゝ文恋文人を考ゝ仏業といゝ老人
弓ゝ文あゝうゝ拾ゝの情をきゝふゝ哀憐の情を傳一枝片ゝと
袖挑灯ゝすゝゝ乃ゝおもきあゝやゝ対恋の情ゝ弓ゝ考へるべきや

○　和乃乗も雪ゝ雪は姿のあゝうゝ　坊智

拾の情ゝ雪ゝ乃ゝ恋ゝ恋の対人▲氏もの花ゝ表ゝ考ゝ乃ゝ弦花月ひを対ゝよし
表ゝを対ゝ乃ゝ去おゝ苦ゝ尺拾ゝを姿ゝ対ゝ乃ゝ恋ゝ又の
情ゝ乃ゝ恋人古ゝを乃ゝ仏ゝ尺ゝ乃ゝ表ゝ考ゝ姿ゝ表ゝ尺

会　貴百乃ゝ弓ゝ　坊

秀句和のむゝ雪の姿の表を面ゝ句ゝ文恋文情を考ゝ雪ゝ文恋
ゝ乃風句恋葉を評ゝ拾あゝ▲文百ゝ文歌乃ゝ文ゝ氏葉ゝ取成ゝ

会　三段ゝ乃ゝ限ゝ乃ゝ京元拾　坊

秀句拾葉の恋ゝ姿を作ゝ拾ゝ文恋情作の用を考ゝ利者の許ゝ毎
をおゝ人ゝ面倒を求ゝ何時も面ゝ人ゝ文あゝ拾あゝ

記　弓人扇ゝ　人

秀句三段ゝ作ゝイヤ限ゝ好ゝ年ゝ句ゝ文恋文体を考ゝ年ゝ仕者の葉

新人▲さらにおを年ゝて新春を新年人い新春と寅ニ自ニ他
を所て老人ゝ強めさやゝり是を新四郎ニ支といふ

会　白黒乃支ゝ　人
新白自慢の漢を笑ふ指と足臣自慢の用を考ゝ奏の舎とゝ人ゝ
支黒老始て味方北地を知てゝ人おのゝ友の頁ゝを懐りゝ欲対と
代つて出ゝゝ是ゝ赤ゝゝを足を整ゝ作ゝを頁迂れゝ人ゝ紙子
言ゝ何と今一番ゝてゝゝと石えゝけて奏翁ゝゝ指ゝ

亟　世事自ゝを申ゝ仕ゝ　分
新白言ゝゝ言ゝ奏ゝと足臣指ゝ神農の新角ゝ

亟　朝ゝ新ゝゝてかゝ美ゝ　坊
新白たゝゝ余ゝゝのゝと足四方を何ふ指と足臣支落ゝたる代を尽ニ
朝上例ゝて後の新を整て新ゝ新ゝ月を新ゝゝ代のゝゝ

拍　代千月もゝゝ拍名ゝゝ　天
新白で字所ゝきの指ゝ人臣新毎の指先を形容ゝ

有　出かけゝゝ清め納云あさもきゝゝ　人
新白の膳ヲ曙ハ言ゝとゝ引接て月ニ答度代と足臣支新を考ゝ
清新笑強と指をかゝる中ゝ新別ゝる先代の弟ニ月辰て客の人ゝ付ゝ足
代表ゝゝ代典あゝしとおゝ和ゝる新ゝ・さゝを清女を殺ゝと作ゝゝる
香炉隆の雪ゝと宮ゝ時笛を捧ゝ新勢を名合ヤ代先代の抽て席を指ゝ
を含ゝ見ゝ人是小町揚貴妃とせい客新のゝ人ゝめて新白の足ゝ通ゝきを

会　代ゝ分信の指ゝ新　坊
新白ア代ゝ新ゝ信事の家ゝ先代ゝ指ゝ足臣支新を考ゝ先代
ゝゝ是師ゝまゝゝ係分信の清新人ゝ指ゝ芽を作ゝ指ゝ支家の清ゝ代ゝ

有　新指ゝ為新の家ゝゝと　坊

和田人に指をさゝる者之来答実者と文人を参る詩と文人注文人のわひを
考る子生に之より氏神の達さも抽て書注「れ人年ちかくる事物の人を
神も歳在生さんと眺やる歌あり▲和の指も忘を及しる楽之

全　指をりて又くる永歴之年　人

和田さるに仏余句上さびる宮と又注文々の物と昔を思ふ歌句

有　事物こそ何ゝてもこの花の世ゝ生れ　宜

和田永歴の乱を歴に今の俗世をあゝ指る又注文人をたるゝ俗世を弃ふい
元亨き指氏の俗ゝて事物伝の由尾も来附ちゝ思寄あゝ

全　ちくはるゝを正風乃友　首

和田のをゝ詩を含て是まの翁中ゝ要歴の者をさ先今内注乃
世ゝ仏まりて情ゝも皆正風を楽人るを皇ゝ参句の歌句ゝり

事乃説注釈終

発願文註釈　堅　法華の位ゝ又り夢句の足主歌句の原方句仏の法と
七部集補註　迎剣　三仮ゝ分ちて千句の生出ゝ次第ゝ委弁ゝ因ゝ
初ゝ乃得を紙ゝ天仏句の原理を実悟する要ゝ之
附句見之鏡　又主歌句句仏の三法ゝ大元乃実指を学ゝれいちゝ
歌句ゝ仏ゝて千変万化の自共ゝ仏ゝ之及の去
舊門通鑑　堅　去蝿月花乃扱法の法格ゝ委参ゝ帯ゝ俗村の打外
服第三辨　四季大堅註　古今抄指麻録
断字辨　詰語岐玉鉾　山四去いてゝを乃原仏を乃
音訓仮字格　言葉乃袖鏡　ん仏古学ゝ乃ゝ法ゝの乃原
とゝ〳〵む
十論大全　十論因陀羅網　忠実変化の仏と多指ゝ希有の
図形ゝて大全五冊ゝ紙面ゝ約ゝ

書林
江戸　須原屋茂兵衛
大坂　塩屋忠兵衛
京　播屋治兵衛